290　楢本磨崖仏（ならもと ま がいぶつ）

コード番号	4410290
所　在　地	宇佐市安心院（あじむ）町楢本
位置情報	北緯 33.4178°　東経 131.3892°
地形図名	2 万 5 千分の 1 地形図　立石　豊後豊岡
概　　説	大分県教育庁管理部文化課編（1991）によると、楢本磨崖仏は、1428 年の墨書銘を有し、かまぼこ型半肉彫りで彫られ、室町時代の磨崖仏の特色を代表する史跡と言われている。縦 4.5m、幅 40m の 2 段の岩に、40 数体の如来像、菩薩像、神将像などの仏像が鎮座している。誰が何の目的で彫ったかは不明である。
詳細説明	磨崖仏が彫られた岩石は、星住・森下（1993）によれば、約 100 万年前の耶馬溪火砕流堆積物の溶結凝灰岩である。この地域は耶馬溪火砕流堆積物の北東側分布限界に近いため溶結度が低く、石仏を彫るのに適した堅さになった可能性がある。磨崖仏は、上下 2 段にわかれた溶結凝灰岩の岸壁に 45 躯にのぼる像高 200cm から 50cm ほどの大小さまざまな仏・菩薩・天部・明王・神将形・比丘形などを浮彫りする。とくに上段の向かって右側に刻まれた不動明王二童子像は他よりも大きく、巧みに表現されて、この磨崖仏の中でとりわけ注目される。この不動明王の向かって右の壁面には「應永三十五年甲戌三月　云々」の墨書銘がみられ、これらの磨崖仏が応永 35 年（1428）ごろにつくられたことを示唆してくれる（大分県教育庁管理部文化課編，1991）。
現　　況	岩石表面には苔が生え、磨崖仏の形態がわかりにくくなっている。2020 年 7 月豪雨における大雨の際にも崖崩れは起こしていない。（現地調査員：堀田英俊）
文化財としての指定状況	・県指定史跡「楢本磨崖仏」（指定：昭和 32 年 3 月 26 日）
その他指定等	
学術上の評価	評　価：耶馬溪火砕流堆積物に彫られた石仏は希少であるため学術上価値が高い。 ランク：Ⅱ

磨崖仏①

磨崖仏②

磨崖仏③

磨崖仏④

全景

位置情報
（産総研地質調査総合センター地質図 navi）

https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php?lat=33.4178&lon=131.3892&z=13&layers=seamless_geo_v2&pin=1&label=_290

引用文献

星住英夫・森下祐一（1993）豊岡地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅），地質調査所，75p.

大分県教育庁管理部文化課編（1991）大分県の文化財．大分県教育委員会，420p.

291　安心院盆地の津房川層（あじむぼんち　つぶさがわそう）

コード番号	4402291
所　在　地	宇佐市安心院（あじむ）町森、田ノ口
位置情報	北緯 33.4038°　東経 131.3470°
地形図名	2 万 5 千分の 1 地形図　斉藤
概　　説	安心院盆地は、北側を前期鮮新世の宇佐火山岩類、南側を更新世ジェラシアン期の人見岳（ひとみだけ）火山岩類により囲まれ、盆地中央部は新第三紀の湖沼成の堆積岩である津房川層からなる（星住・森下，1993）。 1995 年、盆地南部の森地区に露出する津房川層から、ほぼ 1 個体分のゾウの化石が発見され、その後の発掘作業によって様々な化石が発見された。その研究については、安心院動物化石群として琵琶湖博物館から報告されており（高橋・北林編，2001）、湖があった当時は多種多様な動植物がいたことが化石から明らかとなっている。【前回調査　津房川の脊椎動物化石群　4403029】
詳細説明	安心院町森から今井地区にかけての深見川の河床からは砂質泥岩中からシカ、ワニ、カメ、鳥類、オオサンショウウオ、魚類などの多くの動物化石が産出している。また森地区の深見川右岸からはゾウ、クマ、シカ、ワニなどの化石が発掘された。また田ノ口地区の宇佐消防署南部出張所裏の崖からサイ科の化石（Rhinocerotidae）が発掘された。このように安心院盆地は鮮新世動物群の国内屈指の化石産地である。国内においては更新世チバニアン期から完新世にかけての動物相の変遷について多くの研究が積み重ねられてきたが、更新世チバニアン期以前の古脊椎動物群を保存している例は多くはない。その中で津房川層の化石群は産出量と脊椎動物相の多様性の両面で他に例を見ないほど充実しており、「安心院盆地の化石群の研究は現代の列島動物相形成の根幹部分にふれ、大変重要なテーマである」（高橋・北林編，2001）。津房川層下部（430～280 万年前）の化石産出層準は前期鮮新世の後期と推定されている（里口，2016 など）。
現　　況	2004 年には、この発掘地点に近い平山地区でもミエゾウなどの発掘が行われた（高橋・北林編，2018）。今後も本格的な発掘を行わなければ化石は産出されない。当地産出の脊椎動物化石群は、前期鮮新世の古脊椎動物相を研究する上で非常に貴重な資料であるが、県内に保管施設がないため、産出した化石はすべて琵琶湖博物館に収蔵されている。（現地調査員：堀田英俊）
文化財としての指定状況	・国指定天然記念物「オオサンショウウオ生息地」（指定：昭和 2 年 4 月 8 日）
その他指定等	
学術上の評価	評　価：安心院盆地は鮮新世動物群の国内屈指の化石産地であり、学術上の価値が高い。今後の発掘の際には、県内に然るべき保管・展示施設を設置することを考慮すべきである。 ランク：IV

化石産出地点（崖）

崖と看板

化石産出地を示す看板

位置情報
（産総研地質調査総合センター地質図 navi）

https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php?lat=33.4038&lon=131.347&z=13&layers=seamless_geo_v2&pin=1&label=_291

引用文献

星住英夫・森下祐一（1993）豊岡地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅），地質調査所，75p.

里口保文（2016）宮崎層群とのテフラ対比からみた津房川層最下部の年代．地質学雑誌，vol.122, p.223-229.

高橋啓一・北林栄一編（2001）安心院動物化石群.琵琶湖博物館研究調査報告書，no.18，193p.

高橋啓一・北林栄一編（2018）安心院動物化石群 2.琵琶湖博物館研究調査報告書，no.31，86p.

292　福真磨崖仏（附 堂ノ迫磨崖仏）

ふくま まがいぶつ　どうのさこまがいぶつ

コード番号	4410292
所在地	豊後高田市下黒土
位置情報	北緯 33.5849°　東経 131.5332°　（福真磨崖仏）
地形図名	2 万 5 千分の 1 地形図　両子山
概説	磨崖仏は 19 体彫刻されており、案内板には「南北朝時代と推定され」とあるが、「豊後高田の磨崖仏」（豊後高田市教育委員会， 2020）では、鎌倉時代後半から末期にかけての造顕とされている。
詳細説明	地元では四王権現と呼ばれており、江戸時代には無動寺の所管した四王権現宮として四天王を祀ってあったとされる。 周囲は、耶馬溪式景観を呈する標高 200m台の小高い山に囲まれ、更新世カラブリアン期の両子火山の下部火砕流堆積物である凝灰角礫岩で形成されている（石塚ほか， 2009）。仏像も凝灰角礫岩上に彫られ、中央に大日如来座像、四方に四如来座像、六体の観音坐像、地蔵座像、向かって右外側に不動明王、左外側に毘沙門天が彫られ、天台系の影響が色濃いとされる。真玉町誌には法華曼荼羅が彫られているとあるが、確認はできなかった。 中央の大日如来像を始め多くの仏像は彩色されており、深紅（光背）、薄紅（唇）、橙（腕・体など）、黒色（眉）の 4 色が確認でき、当時の美しさが忍ばれる。1857 年に、磨崖仏保護のため、名石工安藤国恒が石造覆屋を造立している。
現況	磨崖仏群入り口には小さな建立時期不詳の鳥居がある。そこをくぐり石段を登り詰めると右手に覆屋があり、仏像は東向きに彫られている。周辺は鬱蒼とした木立で囲まれて直射日光を浴びることがない。覆屋の左側が山手、右側が崖の外側となっている。中央から右側の仏像は乾燥状態も良く比較的輪郭がはっきりしているが、向かって左側の仏像には鮮明さがない。また、上下 2 段に彫られている仏像の上段は下段に比べて保存状態は良い。下段中央より左側の仏像は一部剥落した箇所もあり、蘚苔類の付着が多い。 覆屋の上には土嚢が置かれて屋根が飛ばされないようにしているため、屋根の修復が望まれる。また、取り付け道路や福真磨崖仏覆屋周辺の整備も必要である。 （現地調査員：山田俊治）
文化財としての指定状況	・県指定史跡「福真磨崖仏　附　堂ノ迫磨崖仏」（指定：昭和 35 年 3 月 22 日）
その他指定等	
学術上の評価	評　価：多くの石仏に彩色が施され、また磨崖仏保護のための福真磨崖仏石造覆屋についても、歴史・美術・建築の面からも学術的価値が高い。 ランク：Ⅲ

中央より左側毘沙門天像

中央より右側不動明王像

彩色された中央の大日如来座像

磨崖仏背面絶壁の凝灰角礫岩

覆屋の説明文

位置情報
（産総研地質調査総合センター地質図 navi）

https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php?lat=33.5849&lon=131.5332&z=13&layers=seamless_geo_v2&pin=1&label=_292

引用文献

豊後高田市教育委員会（2020）福真磨崖仏．豊後高田の磨崖仏，ぶんごたかだ文化財ライブラリー Vol.2，豊後高田市教育委員会，p.9-10.

石塚吉浩・尾崎正紀・星住英夫・松浦浩久・宮崎一博・名和一成・実松健造・駒澤正夫（2009）20万分の1地質図幅「中津」．産業技術総合研究所地質調査総合センター.

岩屋 順・窪田勝典（1974）大分の磨崖仏．九環，186p.

真玉町誌刊行会（1978）福真磨崖仏．真玉町誌，p.337-338.

293 福寿寺薬師堂磨崖国東塔

ふくじゅじやくしどう まがいくにさきとう

コード番号	4410293
所在地	豊後高田市田染平野字陽平（ぶんごたかだ たしぶ）
位置情報	北緯 33.4923°　東経 131.5041°
地形図名	2 万 5 千分の 1 地形図　若宮
概説	豊後高田市烏帽子岳（標高 493.6m）の南東、標高 210mの福寿寺境内にある薬師堂の巨岩に彫られた国東塔である。独立した石造りの国東塔ではなく、大岩に刻まれた珍しいレリーフ（浮き彫り）である。塔身の銘は永享癸丑（えいきょうみずのとうし）とあり 1433 年で室町時代にあたる。
詳細説明	福寿寺は、陽平地区に 1896 年に浄土真宗の説教所として開かれた寺である。寺の左手奥にある薬師堂には本尊とする薬師如来像が正面に、他にも 5 基の磨崖仏が彫られている。国東塔は向かって右の北側に彫られており、塔高は約 90cm。彫られている大岩は宇佐火山岩類陽平安山岩（石塚ほか，2005）の凝灰角礫岩で直径 20cm ほどの大礫も確認できる。
現況	薬師堂は木製で中の磨崖仏は雨風にさらされることはないが、長い年月で形も色も風化がすすんでいる。薬師堂正面の薬師如来座像（60cm）は、かろうじて判別できるが、残りの磨崖仏は尊名も不詳である。磨崖国東塔については、基礎は二重で、台座が反花（かえりばな）と蓮華座からなっている。表面は蘚苔類で覆われ、これから更に不明瞭になると思われる。地区の人が管理しており、年 2 回供養や清掃などを行っている。地区の人口減と高齢化のため保存や管理に不安が残る。 （現地調査員：柳本眞一郎）
文化財としての指定状況	・大分県有形指定文化財「福寿寺薬師堂磨崖国東塔」（指定：昭和 55 年 4 月 8 日）
その他指定等	
学術上の評価	評　価：国東塔を磨崖（レリーフ）として表現しているのは希少であり、県内では 2 基のみであるため学術上価値が高い。 ランク：Ⅲ

福寿寺の入口にある文化財の看板

福寿寺の本堂の寺名「日陽山福寿寺」

福寿寺本堂の左にある薬師堂

民家の裏山は宇佐火山岩類の凝灰角礫岩の露頭

薬師堂の北側の大岩に彫られた磨崖国東塔

位置情報
（産総研地質調査総合センター地質図 navi）

https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php?lat=33.4923&lon=131.5041&z=13&layers=seamless_geo_v2&pin=1&label=_293

引用文献

石塚吉浩・水野清秀・松浦浩久・星住英夫（2005）豊後杵築地域の地質．地域地質研究報告(5 万分の 1 地質図幅)，産業技術総合研究所地質調査総合センター，83p.

櫻井成昭（2005）六郷山と田染荘遺跡－九州国東の寺院と荘園遺跡－．日本の遺跡 4，同成社，東京，190p.

294 熊野磨崖仏（附 元宮磨崖仏・鍋山磨崖仏）

くまの まがいぶつ　もとみやまがいぶつ　なべやままがいぶつ

コード番号	4410294
所在地	豊後高田市田染平野
位置情報	北緯 33.4782°　東経 131.5257°　（熊野磨崖仏）
地形図名	2 万 5 千分の 1 地形図　若宮　両子山
概説	国東半島には多くのお寺や神社があり、それに伴い木造や石造の仏像も存在する（櫻井，2005）。豊後高田市には約 20 か所の磨崖仏がつくられ、仏像の数も 80 体ほどある。田染地区にも磨崖仏が多く、崖の岩石を調査するとことで磨崖仏が彫られた石材の傾向をつかむことができる。
詳細説明	国東半島では、白亜紀の変成岩や花崗岩類を両子山火山噴出物の溶岩や凝灰角礫岩（更新世カラブリアン期）とその南西側の古期宇佐火山岩類の凝灰角礫岩（後期中新世）が覆っている（石塚ほか，2009）。両子山火山噴出物と古期宇佐火山岩類の境界付近を桂川が侵食して流れ、熊野磨崖仏などは古期宇佐火山岩類分布域に位置する。桂川流域では凝灰角礫岩を覆って約 100 万年前の耶馬溪火砕流堆積物（溶結凝灰岩）が存在するとされる（松本ほか，1962）が、その後の研究（松本・成重，1985；石塚ほか，2009）では触れられておらず、存在は不明確である。桂川沿いの豊後高田市田染横嶺や真中付近には、約 9 万年前の灰色の阿蘇溶結凝灰岩（阿蘇 4 火砕流堆積物）が低い崖をつくって局部的に分布する。
現況	1955 年、熊野磨崖仏・元宮磨崖仏・鍋山磨崖仏がまとめて国指定史跡に指定され、1964 年には熊野磨崖仏が国指定重要文化財に指定されている。各磨崖仏の造立時期は平安後期から室町時代までと推定されている。風雨により磨崖仏が欠けている部分もあるが、地域の方々により屋根や建物で保護されこれまで現状維持で保つことができている。 3 つの磨崖仏はどれも凝灰角礫岩の崖を彫って作製したものである。熊野磨崖仏を除き、2 つの磨崖仏は木造建造物で保護されているが岩質上風化の恐れは免れない。磨崖仏の後部は自然環境そのままになっているので、これ以上の損壊を防ぐ手立てが必要である。（現地調査員：高石光治）
文化財としての指定状況	・国指定重要文化財「熊野磨崖仏」（指定：昭和 39 年 5 月 26 日） ・国指定史跡「熊野磨崖仏　附　元宮磨崖仏及び鍋山磨崖仏」（指定：昭和 30 年 2 月 15 日、平成 8 年 3 月 28 日追加指定）
その他指定等	
学術上の評価	評　価：国東半島は仏教文化と地質的な条件が重なりあって、磨崖仏、国東塔、板碑、五輪塔などの石造美術が発達した地域であり、古文書や地質学的研究との関連性も高いため学術的価値が高い。 ランク：Ⅳ

不動明王像

凝灰角礫岩の側面

元宮磨崖仏不動明王右側

元宮磨崖仏の崖

鍋山磨崖仏の崖に見える角礫

位置情報
（産総研地質調査総合センター地質図 navi）

https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php?lat=33.4782&lon=131.5257&z=13&layers=seamless_geo_v2&pin=1&label=_294

引用文献

石塚吉浩・尾崎正紀・星住英夫・松浦浩久・宮崎一博・名和一成・実松健造・駒澤正夫（2009）20万分の1地質図幅「中津」．産業技術総合研究所 地質調査総合センター．

松本幡郎・成重欣也（1985）大分県国東半島の火山地質．熊本大学教養部紀要，自然科学編，no.20，p.61-76.

松本達郎・野田光雄・宮久三千年（1962） 日本地方地質誌 九州地方．朝倉書店，東京，423p.

櫻井成昭（2005）六郷山と田染荘遺跡－九州国東の寺院と荘園遺跡－．日本の遺跡 4，同成社，東京，179p.